

変数係数線形常微分方程式

$$\frac{d}{dt} \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = A(t) \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} b_1(t) \\ \vdots \\ b_n(t) \end{pmatrix} \text{ を考える。 } \begin{pmatrix} b_1(t) \\ \vdots \\ b_n(t) \end{pmatrix} = 0 \text{ のとき同次形とい$$

うが、このとき解の空間は  $n$  次元ベクトル空間である。すなわち  $t = t_0$  におけ

る初期値  $\begin{pmatrix} x_1^0 \\ \vdots \\ x_n^0 \end{pmatrix}$  によって解は定まり、 $\begin{pmatrix} x_1(t) \\ \vdots \\ x_n(t) \end{pmatrix} = G(t) \begin{pmatrix} x_1^0 \\ \vdots \\ x_n^0 \end{pmatrix}$  と書かれる。ただし

$G(t_0) = I$  (単位行列) である。ここで、 $\frac{d}{dt}G(t) = A(t)G(t)$  となる。 $G(t)$  の第  $j$

列は  $\begin{pmatrix} \vdots \\ 1 \\ \vdots \end{pmatrix}$  を初期値とする解である。

$\det G(t)$  を知ることは、解についていくつかの予測をする上で重要である。すなわち、 $\det G(t)$  は  $t_0$  における体積 1 のものが  $t$  においてどうなっているかを示す。もしも、 $t \rightarrow \infty$  のときにすべての解が 0 に収束するならば、 $\det G(t) \rightarrow 0$  となるはずである。

このとき、

定理。  $\det G(t) = e^{\int_{t_0}^t \text{tr}A(s)ds}$  が成立する。

言葉を変えて言うと、 $\det G(t)$  は、 $\frac{d}{dt} \det G(t) = \text{tr}A(t) \det G(t)$ ,  $\det G(t_0) = 1$  を満たす。すなわち、 $\det G(t)$  は、常微分方程式  $\frac{dx}{dt} = \text{tr}A(t)x$ ,  $\det x(t_0) = 1$  の解である。

実際  $G(t) = \begin{pmatrix} g_1(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix}$  であるとする ( $g_i(t)$  は第  $i$  行) と、 $\frac{d}{dt}G(t) = A(t)G(t)$  は

$$\frac{d}{dt}g_i(t) = \sum_{j=1}^N a_{ij}(t)g_j(t) \text{ ということである。}$$

$$\begin{aligned}
& \frac{d}{dt} \det G(t) \\
= & \det \begin{pmatrix} \frac{dg_1}{dt}(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ \frac{dg_2}{dt}(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \cdots + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ \frac{dg_n}{dt}(t) \end{pmatrix} \\
= & \det \begin{pmatrix} \sum_{j=1}^n a_{1j}(t)g_j(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ \sum_{j=1}^n a_{2j}(t)g_j(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \cdots + \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ \sum_{j=1}^n a_{nj}(t)g_j(t) \end{pmatrix} \\
= & \sum_{j=1}^n a_{1j}(t) \det \begin{pmatrix} g_j(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \sum_{j=1}^n a_{2j}(t) \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_j(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} + \cdots + \sum_{j=1}^n a_{nj}(t) \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_j(t) \end{pmatrix} \\
= & \sum_{j=1}^n a_{jj}(t) \det \begin{pmatrix} g_1(t) \\ g_2(t) \\ \vdots \\ g_n(t) \end{pmatrix} = \operatorname{tr} A(t) \det G(t)
\end{aligned}$$

注意。  $A(t) = A$ ,  $G(t) = e^{tA}$  のとき、  $\det e^{tA} = e^{t \operatorname{tr} A}$  となる。これはジョルダン標準形からも容易に示される。

言葉。

$\frac{d}{dt} \vec{y} = A(t) \vec{y}$  の解  $\vec{y}_1(t), \dots, \vec{y}_n(t)$  が一次独立のとき、  $\vec{y}_1(t), \dots, \vec{y}_n(t)$  を一組の基本解あるいは解の基本系と呼ぶ。

基本解を並べた行列  $G(t)$  を基本解行列と呼ぶ。

2つの基本解行列  $G_1(t), G_2(t)$  に対し、  $B = G_1(t_0)^{-1} G_2(t_0)$  とおくと、  $G_2(t) = G_1(t)B$ 。

注意。基本解行列  $G(t)$  に対し、  $\det G(t)$  は  $\frac{dx}{dt} = \operatorname{tr} A(t)x$  を満たし、  $e^{\int_{t_0}^t \operatorname{tr} A(s) ds}$  基本解行列のとり方によらない。

随伴線形微分方程式. 基本解行列  $G(t)$  は  $\frac{d}{dt} G(t) = A(t)G(t)$  を満たす。ここで、逆行列を考える。  $G(t)^{-1} = H(t)$  とすると  $I = G(t)H(t)$  を微分して、  $0 = (\frac{d}{dt} G(t))H(t) + G(t)(\frac{d}{dt} H(t)) = A(t)G(t)H(t) + G(t)(\frac{d}{dt} H(t)) = A(t) + G(t)(\frac{d}{dt} H(t))$ 。従って  $\frac{d}{dt} H(t) = -H(t)A(t)$ 。転置行列をとれば  $\frac{d}{dt} {}^t H(t) = -{}^t A(t) {}^t H(t)$ 。

すなわち、  $\frac{d}{dt} \vec{z} = -{}^t A(t) \vec{z}$  の基本解行列の1つは  ${}^t G(t)^{-1}$  で与えられる。この微分方程式は随伴する線形微分方程式と呼ばれる。

$\frac{d}{dt} (\vec{z}(t) \bullet \vec{y}(t)) = (-{}^t A(t) \vec{z}(t)) \bullet \vec{y}(t) + \vec{z}(t) \bullet (A(t) \vec{y}(t)) = 0$  となる。従って、  $\vec{z}(t) \bullet \vec{y}(t)$  の値は一定である。特に、  $A(t)$  が交代行列 ( ${}^t A(t) = -A(t)$ ) であれば、  $\|\vec{y}(t)\|$  は定数となる。

「随伴する」という考え方は、 $L = \frac{d}{dt} - A(t) : \text{Map}(\mathbf{R}, \mathbf{R}^n) \rightarrow \text{Map}(\mathbf{R}, \mathbf{R}^n)$  と内積  $\langle \vec{f}, \vec{g} \rangle = \int_a^b \vec{f}(t) \cdot \vec{g}(t) dt$  について  $\langle L\vec{f}, \vec{g} \rangle = \langle \vec{f}, L^*\vec{g} \rangle$  すなわち、普通の行列だったら、(共役)転置行列となるものを考えるということである。随伴するものと等しければ、対称行列と同様の良い性質を持つことが期待でき、随伴するものと合わせて0になれば、反対称行列と同様の良い性質を持つことが期待できる。

$$\begin{aligned} & \langle L\vec{f}, \vec{g} \rangle \\ &= \int_a^b \left( \frac{d\vec{f}}{dt} \cdot \vec{g} - (A(t)\vec{f}) \cdot \vec{g} \right) dt \\ &= \left[ \vec{f} \cdot \vec{g} \right]_a^b - \int_a^b \left( \vec{f} \cdot \frac{d\vec{g}}{dt} + \vec{f} \cdot ({}^t A(t)\vec{g}) \right) dt \\ &= \langle \vec{f}, L^*\vec{g} \rangle \end{aligned}$$

だから、 $a, b$  で  $\vec{0}$  になる関数を扱っていれば、 $L^* = -\frac{d}{dt} - {}^t A(t)$  となる。

ここで、 $a, b$  で  $\vec{0}$  とならない場合についても  $L^* = -\frac{d}{dt} - {}^t A(t)$  として書いた  $\langle L\vec{f}, \vec{g} \rangle - \langle \vec{f}, L^*\vec{g} \rangle = \left[ \vec{f} \cdot \vec{g} \right]_a^b$ , すなわち

$\vec{z}(b) \cdot \vec{y}(b) - \vec{z}(a) \cdot \vec{y}(a) = \int_a^b \left\{ \left( \frac{d}{dt} \vec{z}(t) + {}^t A(t)\vec{z} \right) \cdot \vec{y}(t) + \vec{z}(t) \cdot \left( \frac{d}{dt} \vec{y}(t) - A(t)\vec{y}(t) \right) \right\} dt$  をグリーンの公式と呼ぶ。

非同次の場合。

$\frac{d}{dt} \vec{y} = A(t)\vec{y} + \vec{b}(t)$  に対して、

定数変化法を試みることが出来る。基本解行列  $G(t)$  について、

$\vec{y}(t) = G(t)\vec{z}(t)$  とすると、

$\frac{d}{dt}(G(t)\vec{z}(t)) = A(t)G(t)\vec{z}(t) + G(t)\frac{d}{dt}\vec{z}(t) = A(t)G(t)\vec{z}(t) + \vec{b}(t)$  を得る。

従って  $\frac{d}{dt}\vec{z}(t) = G(t)^{-1}\vec{b}(t)$  となるように  $\vec{z}(t) = \int_{t_0}^t G(s)^{-1}\vec{b}(s)ds$  とすれば

よい。

$\frac{d}{dt}\vec{y} = A(t)\vec{y} + \vec{b}_i(t)$  の解  $\vec{y}_i(t)$  が見つかっているとき、 $\frac{d}{dt}\vec{y} = A(t)\vec{y} + \sum_{i=1}^N c_i \vec{b}_i(t)$

の解は  $\sum_{i=1}^N c_i \vec{y}_i(t)$  で与えられる。(重ね合わせの原理)

変数係数線形常微分方程式で最も面白いのものは  $A(t)$  が周期的であるときである。 $A(t+T) = A(t)$ . このとき、 $G(t+T) = G(t)B$  となる。 $G(t+NT) = G(t)B^N$  だから、 $B$  を求めることが出来れば、解の様子はかなり良くわかる。 $B$  はフロケ Floquet の行列と呼ばれる。